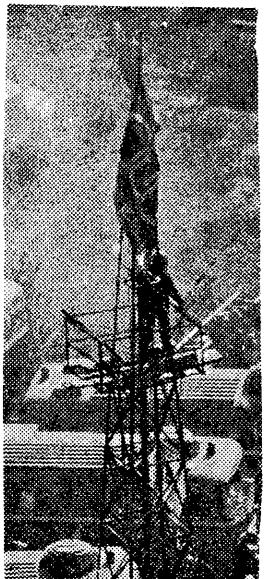


# 三里塚・3月30日開港実力阻止!



同志諸君・讀者諸君！いまでは、誰もが革命的情勢の端緒的開始を認めている。労働者被抑圧勤労大衆がこれまでどおりに生活することをのぞまない、と同時に、ブルジョア階級がこれまでどおりに形で支配を維持できなくなつた。三里塚斗争を頂点に人民の活動性がたかまりつつある。革命的情勢の端緒期に於けるマルクス・レーニン主義者の任務は「旧来の政府をうちくだく（またはゆるがす）にたりるほど強力な革命的大衆行動をおこなう革命的階級の能力」を形成・蓄積することである。

今日、ブルジョア階級独裁を「うちくだく」能力がある革命的階級はブルレタリア階級である。ブルレタリア階級は、貧農と同盟し、社会主義統一戦線を結成し、ブルジョア階級独裁をうち碎き、ブルレタリア階級独裁を樹立する。生産関係では、資本主義的私的所有を廃止し、社会主義的所有を樹立する。ブルレタリア階級独裁と生産関係の面でのたえまない改革の中で、全ての被抑圧勤労大衆を解放する。ブルレタリア階級の集中的表現は党である。革命党の指導をつうじて労働者階級は、自己の革命的能力を自覚し、発揮できる。現実を見つめよう。日本共産主義運動の現実はどうだ。混迷と分散の時代は終り、統一と團結の時代がゆっくりと幕を上げた。ブンド系の多くが、また、「毛沢東思想派」の多くが、統一と團結の必要を説いている。しかし、ブンド系と「毛沢東思想派」がただちに、統一と團結に向うことは不可能である。何故か、我々の場合は、ブン

同志諸君・讀者諸君！

三里塚三月決戦の幕が上り、「三日三十日開港実力阻止」を合言葉にます多くの人が舞台に登場しはじめている。人民の魂を揺さぶり、政治舞台への登場を決定的に促進している第一の要素は、要塞防衛戦の勝利である。放水と催涙弾の集中攻撃、執拗なレインジャー部隊の鉄塔破壊をはじめ、零下7度の厳寒にたえ、40時間の攻防戦を斗いねいた四戦士を中心、三里塚反対同盟と斗う人民は、警察権力の三月決戦体制の解体に向けた、先行的予防的反革命攻撃を打ち破った。第二の要素は、動労千葉の「ジエット燃料輸送阻止・三里塚斗争支援」の順法斗争がますます強化されていることである。国労の裏切り、動労本部・東京地本の条件斗争へのすりかえに抗し、動労千葉は労働者階級の誇りと道義、未来をかけて斗いを堅持し、強め、勝利の展望を切り開きつつある。第三の要素は、第一第二から、三里塚反対同盟と斗う人民の団結がますます打ち固められ、戦斗体制がますます強固に構築されていることである。同志諸君・讀者諸君！三月三十日開港実力阻止！に総決起せよ。巨万の人民を組織し、組織し、組織し、組織し、三里塚斗争へ出征せよ！

同志諸君、讀者諸君！いまでは、誰もが革命的情勢の端緒的開始を認めている。労働者被抑圧勤労大衆がこれまでどおりに生活することをのぞまない、と同時に、ブルジョア階級がこれまでどおりに形で支配を維持できなくなつた。三里塚斗争を頂点に人民の活動性がたかまりつつある。革命的情勢の端緒期に於けるマルクス・レーニン主義者の任務は「旧来の政府をうちくだく（またはゆるがす）にたりるほど強力な革命的大衆行動をおこなう革命的階級の能力」を形成・蓄積することである。

第 20 号  
78.2.10 頒  
連絡先  
中央書三  
号 150 円  
月 横便 109 浜私号舍

# 革命通信

第 20 号  
78.2.10 頒  
連絡先  
中央書三  
号 150 円  
月 横便 109 浜私号舍

共産主義者同盟  
マルクス・レーニン主義派

ドの分派斗争に決着づけねばならない。「毛沢東思想派」の諸君も、自分達の分派斗争に決着をつけねばならない。思想・政治路線が第一である。しかし、継承性を軽視してはならない。ゆえに、眞のマルクス・レーニン主義者は、单一の戦斗指令部の創建を中心としてブルレタリア階級の革命的能力の形成・蓄積を考えねばならない。我々は本年度の任務を、獲得した『綱領草案』・建党路線に立脚し、独立自主と統合の建党運動を大いに推進し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド・武装して斗う非合法党的創建にむかう中核部隊の創出、と決定した。同志諸君・讀者諸君！これをやりとげれば、ブンドと「毛沢東思想派」がマルクス・レーニン主義の下に統合と團結する画期的地平が開けてくる。中国共産黨の戦争に備え国民経済を大いに発展させる、同時に、戦争の發動・勃発を極力遅らせ革命の要素を増大させる斗いと第三世界の民族解放斗争は、日本帝国主義の朝鮮侵略反革命戦争の發動を極力遅らせ、その結果、日本帝は矛盾を労働者勤労被抑圧大衆に転嫁せざるをえない。それは、不可避に、階級斗争を激化させ、人民を社会主義革命に近づける。かくて、二つの斗いは、建党運動の國際的条件なのである。

中国共産党11全代会と「三つの世界論」について

同志諸君・讀者諸君！日を國際情勢に転じてみれば、革命の要素がひきつき増大する、と同時に、戦争の要素もいちじるしく増大している。ここで、はつきり確認しておく事がある。第一に、社会主義国を根拠地とする第三世界の民族解放斗争が、戦後の米帝一元世界支配体制を打ち破ったこと。第二に、米帝の後退と間隙をぬってソ連社帝が世界支配に乗りだしたこと、第三に、第一、第二の結果、70年前後から戦争と革命の時代が始まつたのであること。ゆえに、第一次世界大戦時と現在を同一化することはできない。戦争の要素が革命の要素を増大させた、と考えてはならない。

中国共産党11全代会は、革命の要素を打ち固め、増大する偉大な大会であった。ところが11全代会を「ひとことで特徴づけるならば新実權派の勝利の祭典である」と批判する諸君がいる。彼等の主張は、4点にまとめられる。第一、華政治報告においては、「三大革命運動」の名のもとに、階級斗争、生産斗争が並列化されているばかりではなく、生産斗争それ自体の重要性がなしきずして強調されている。第二に、「ソ連」社会帝国主義」を主敵としている。第三に、ブルレタリア文化大革命の終結を謳いあげている。第三に、現段階の中共指導部が「安定團結」の名のもとに新実權派と華國鋒グループの妥協によつて



からくも成立している。第一について、華國鋒は『政治報告』で、「社会主義経済を発展させることは、プロレタリア階級独裁の基本的任務の一つである。社会主義の方向をつらぬくという前提のもとに、生産力を急速に発展させること、これはプロレタリア階級独裁の物質的基礎を強化」する、と述べている。どういう事か。「社会主義の方向をつらぬく」ためには、資本主義の復活を防ぎ、修正主義を批判・打倒するプロ独・継続革命が必要である。つまり、華國鋒は階級斗争を前提に生産力を促す、といっているのだ。第二について。これは、全くのデマである。第三について。華國鋒は、第一次プロレタリア文化大革命が「『四人組』粉碎をその標識として勝利のうちに幕をとじた」と宣言した。しかし、プロレタリア文化大革命そのものの終結などは言っていない。華國鋒は、「安定と团结は階級斗争が要らないというわけではない」と指摘し、「文化大革命のような性質をもつ政治大革命は、今後何回をもくりかえされであろう」と、述べている。これは、プロ独・継続革命をあくまで堅持・推進する見地である。第四について。これは、華國鋒が、走資派の鄧小平と妥協・連合して「四人組」を追放したと批難しているのだ。我々は、華國鋒を毛沢東思想の正統な後継者として支持する。現在の中共指導部が新実権派と華國鋒グループの妥協によって成立したか否かは、中国共産黨の内部問題であり、我々がとやかく言うべき事柄ではない。中国共産黨は、試練をへたマルクス・レーニン主義党であり、走資・実権派に党が乗つとられることはないであろう。

また、中国共産黨の「三つの世界論」は、戦争と革命の時代に於ける戦略態勢を明らかにし、反帝反社帝反霸權斗争の偉大な勝利をめざして斗うのを励ましている。これは、当面する革命の大方向、だれが革命の主力軍であり、だれが主要な敵であるかを明らかにしており、支持できる。しかし、第二世界を反独立民主主義革命と規定しているのは誤りである。ある諸君は、「三つの世界論」は、「帝と帝の矛盾を主要矛盾と見る修正主義の理論」だと、批判している。「三つの世界論」の眼目は何か。「ソ米両霸權主義国」の世界争奪、全世界人民の脅威、この両国にたいする全世界人民の抵抗は当面の世界政治の中心問題となつてゐる」現実に測して、「全世界の人民を一方とし、ソ米両霸權主義国をもう一方とする、現代の世界的範囲における最重要的階級斗争の戦略態態を概括してゐる」点だ。このどが「帝と帝の矛盾を主要矛盾」とする見地なのか。階級斗争を要に、米ソ両超大国の矛盾を見、第三次世界大戦の不可避性とそれへの戦略的態勢を明らかにしてゐるのではないか。

中国を先頭にした社会主義と第三世界の民族解放斗争は前進し、戦争の発動・勃發を極力遅らせ、革命の要素が増大する、と同時に、米ソの霸權主義がいよいよ激化している。第一世界に矛盾が集中し始め、西欧帝・日帝の体制的危機が確実に深まつてゐる。

プロ独・社会主義革命の前提がますます形成されてゐる！

日本帝国主義は、米帝との経済面での対立を深め、原子弹問題ではソ連社帝も利用し、独自の道を模索してゐる。しかし、日米安保体制の枠内での出来事である。米帝の重層的・円高攻撃の矛盾は、国内市場の活発化の名のもとに、労働者被抑圧・勤労大衆へ転化される。搾取・抑圧・収奪が激化する。「失業・不況」の解決能力を資本家階級は持つていない。結局、日帝は、アジア、特に朝鮮侵略反革命の強化のために、またプロレタリア階級の増強への対抗、社会主義革命に対する反革命のために、帝国主義段階での議会制ブルジョア民主主義の社会的支柱である修正主義、社会帝国主義、労働貴族を「連合政権」に動員する、と同時に、天皇制を前面に押しだし、国家権力を肥大化させ、両者の結合を隠微に推進し、潜行的に天皇制・ブルジョアシズムを準備せざるを得ないのである。上部構造の変化に伴ひ、西獨型の「連合政権」である。しかし、西獨型を保障する「労使関係の安

定」が確立できそうもない。同盟・JCの足下が搖ぎ始めてくる。例えば造船重機の組合員が激減し、反乱があちらこちらに起きてる。自覺した労働者は、西獨型「連合政権」か、伊型の「連合政権」かの二者択一を断固拒否する。全ての「連合政権」の本質がブルジョア階級独裁であるからだ。労働者は、ブルジョア国家権力を打倒し、プロレタリア階級独裁を樹立し、資本主義的私的所有を廃止し、社会主義的所有的に改め、全人民の武装を実現しない限り、経済的、政治的、文化的從属から解放されない。「不況と失業」の地獄から救われる術がない。自覺した労働者は、日帝が体制的危機に直面し、国家独占資本主義を強化、拡大する中に、社会主義革命の物質的前提がますます整備され、階級斗争がますます激化する事を見、社会主義革命の確信をますます深める。同盟の下に結集し、安保粉碎、日帝打倒、米帝追放、プロ独社会主義革命を目指す。

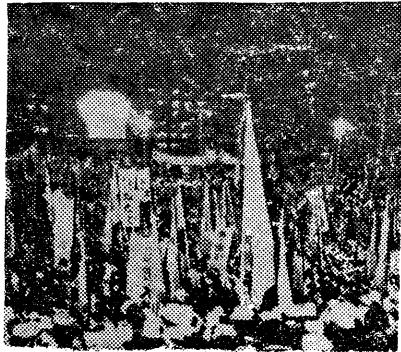
### 全力・全精力を建党運動へ

同志諸君・読者諸君！ 同盟は、当面、暴力革命、プロ独、社会主義革命を内容とする宣伝、扇動、組織を活動の中心にする。つまり、職業革命家の組織を中心とし、中央集権主義を組織原則とし、全国政治新聞を軸に、マルクス・レーニン主義党を建設し、その指導の下に社会主義統一戦線を結成していくのだ。かかる任務の完遂を基礎として、天皇制・ブルジョアシズムに対するプロ独、社会主義革命戦争、武装蜂起が、マルクス・レーニン党を武装して斗う非合法党に改組し、社会主義統一戦線の機関として赤軍を樹立して担ぐ、斗われる。

社会主義の宣伝、扇動、組織は、どの部分を対象にして行なうべきか。革命的情勢が端緒的に始まつてゐるが、労働者の意識は平穏に、どうにかがまんできる生活をつづけていくか、それとも冒險に身を投じるかの段階にある。その中で、先進的部分が先行的に他人の利益のために、縁もゆかりもない利益のために飢えて屠殺場に行くかそれとも、社会主義のために、人類の10分の9の利益のために大きな犠牲をはらうかに直面し、マルクス・レーニン主義の獲得と党派の選択に向いつつある。建党運動の人材は、当面この部分から募集する以外はない。ゆえに、我々は、かかる部分の「はら」を読み、諸問題にマルクス・レーニン主義的な暴露の見本、典型を示すようない。マルクス・レーニン主義的な暴論の見本、典型を示すよう努力せねばならない。共産主義者の統合を推進し、模範を示すことが、彼等に対する最大の働きかけとなるであろう。

建党運動には「二側面がある。独立自主と統合である。独立自主について。一大建党運動を戦取するために、全力、全精力を全同志が注ぎこむとは、第一に、『革命通信』の月一度定期発刊を実現すること、第二に、『綱領草案』の組織物質化を、第一を基礎に推進すること、第三に、統合に關して横たわる様々な問題に対し、集中討議し、見解を練り上げ、持つよう心懸ることである。第二について説明する。二要素がある。第一の要素は、計画としての戦術を一層具体化すること。つまり、中央委員会を強化し、地区グループ、工場内下級委員会、特殊グループを暴力革命、プロ独・社会主義革命の見地から首尾一貫して形成、蓄積、発展することである。第二の要素は、経済斗争、改良斗争、民主主義斗争を「支持し、指導する」と同時に、改良主義に反対し、プロレタリア階級独裁によつてのみ真の民主主義が実現できること主張する「能力を高め、蓄積すること」である。それには、安保粉碎、日帝打倒、米帝追放、プロ独・社会主義革命のスローガンを「民族問題をもふくむあらゆる問題において徹底的に革命的な立場に結びつけること」が肝心である。経済斗争、民主主義斗争、改良斗争に、外部から社会主義革命一般を対置して「改良主義に反対し、プロレタリア階級独裁によつてのみ真の民主主義が実現できること主張する」ことはたやすい。しかし、それは「支持し、指導する」ことの放棄であり、帝国主義的経済主義である。口先では何であれ、實際は、貧農、被差別部落大衆、都市小ブルジョアジーの斗争を否定し、社会主義統一戦線に反対する立場である。我々は「改良主義的な改革とは、支配階級がその支配を維持しながら行う讓歩にすぎず、支配階級の権力の基礎を掘りくずすことのない改変である。革命的改変とは、権力の基礎を掘りくずす改変である」（レーニン）という言葉を頭にたたきこみ『綱領草案』、特に第一章を核心として押さえ、大衆斗争に対する見地を、具体的な課題にそつて練り上げ「支配階級の権力の基礎を掘りくずす」革命的

# 石川氏 突き進め！ 再審貫徹を実力で奪還！



5千の労農水学人民は、全ての融和主義・日和見主義を粉砕し、狹山斗争勝利に突き進む！

部落完全解放！

☆8／9上告棄却弾劾！

☆再審貫徹！石川氏即時奪還！狹山斗争勝利！

☆東京高裁の「早期再審却下」策動粉碎！

☆安保粉碎、日帝打倒、米帝追放、プロ独・社会主義革命勝利！

立場を確立するのだ。かくて、社会主義革命に人民を近づけ、移行する条件を形成するのである。第二を一言でいえば、社会主義革命と階級斗争の現われの遊び目をつかだし、プロレタリア階級を実際に組織する生命力をもつた組織へ同盟を高め上げていくということだ。これが、第一、第三を支え、保証する。統合について。  
統合に向けた具体的な政策として「共同の論戦誌」の発刊を提起するにあたり、我々は共同して論戦もやれば斗争もしようとした。共同機関に誤解されている。反帝、社会主義共斗の結成や「共同の論戦誌」の発刊は、あくまで党建設にむけたものである。従って、ここでの共同斗争とは、四つの政治基準で①当面する全人民的課題

## 1.2.7 狹山再審闘争勝利 東京集会に五千！

1月27日夕、日比谷野音において部落解放東京共斗會議の主催の下、右翼融和主義、日和見主義の狹山斗争「終焉論」をはねのけ、再審貫徹／石川奪還／の新たな戦いの決意をみなぎらせた全部の斗う部落大衆労働者、学生五千人を結集し、「狹山再審斗争勝利東京集会」が開かれ、集会後、機動隊の不当な規制・弾圧をはねのけ、ときわ橋公園までの戦斗的デモが行なわれた。

我が同盟は、集会場において「部落解放運動と社会主義・労働運動の結合」「安保粉碎、日帝打倒、米帝追放、プロ独・社会主義革命勝利／部落完全解放！」の観点から、再審貫徹／石川氏即時奪還／狹山斗争勝利／に向け、「革命通信・号外」配布を軸とした革命的宣伝戦を貫徹し、集会に結集した部落大衆、労働者と共に、この日の戦いを最後まで戦い抜いたことを報告したい。

同志諸君！読者諸君！

8・9上告棄却攻撃は、体制的危機が深まり、社会主義革命へ向けた革命情勢の端緒的開始の中で、日帝のブルジョア階級独裁国家権力の維持・延命に向けた反革命差別攻撃である。「上層も下層も今まで通りやつていけない」情勢の到来に対し、日帝は、ブルジョア階級独裁の労働者人民分断支配のカナメたる部落差別と一貫して戦斗的に戦い抜いてきた部落解放運動、とりわけその最基軸たる石川氏と狹山斗争を圧殺し、部落差別を飛躍的に強化・拡大し、もつてブルジョア議会制民主主義の反動化と天皇制ファシズムへの統治形態の転換を押し進めんと、なりふりかまわぬ攻撃をしかけてきたのだ。我々は、日帝の反革命部落差別攻撃の激化に対し、部落解放運動－狹山斗争の中で培かれてきた部落完全解放を戦取するプロ独立・社会主義に向けた労農水学の団結の地平を、融和主義・日和見主義から守り抜き、これをマルクス・レーニン

ン主義党－社会主義統一戦線の革命陣型へとしっかりと打ち固めつつ、同時に東京高裁の「早期再審却下」策動と断固対決し、再審貫徹、石川氏即時奪還斗争の巨大な爆発を戦い取らねばならない。

同志諸君！読者諸君！

昨夏一秋と大爆発を克ち取った8・9上告棄却糾弾斗争によって追いつめられた日帝は、再審貫徹・石川奪還に向けた狹山斗争の更なる大高揚に恐怖し、東京高裁・四谷・山本体制を「8・9上告棄却決定護持体制」として組織し、「早期再審却下」をドス黒く策動している。すでにこの2月をメドに、「証拠保全の請求リストを提出せよ！」として、石川氏の完全無実を明らかにし、日帝国家権力の部落差別犯罪を満天下に暴きだす、数多くの証拠・証言を全面的に圧殺せんとしてきている。我々は、はつきりと反動化しつつあるブルジョア階級独裁の国家権力に対する一切の幻想や願望を断ち切り、一部に見られる狹山斗争「終焉論」や拾頭しつつある右翼融和主義と戦い、これを批判・打倒し、更に全国の地域・職場・学園での大衆的創造的取り組みと実力斗争を押し抜け、もつて東京高裁の「早期再審却下」策動を粉身ジンに粉砕し、狹山斗争勝利／の血路を全力で切り開いていくうではないか！

同志諸君！読者諸君！

「部落の解放なしに労働者階級の解放なく、労働者階級の解放なしに部落の解放なし。」  
この解放テーマをしっかりと握りしめ、社会帝国主義（日「共」、協会、「日本のこゑ」カクマル）、修正主義、右翼融和主義と断固として戦い打倒し、日本階級斗争における部落解放運動の輝ける歴史と地平を決して後退させることなく、来たるべき日本社会主義革命の偉大な勝利と部落完全解放に向かって、狹山斗争勝利を突破口に不屈の前進を戦い取っていこうではないか！

同志諸君！プロ独立・社会主義革命勝利の原動力をたる「プロ独立を要とする共産主義と労働運動の結合」を、武装し戦う非合法のML主義党創建を要に斗い取れ！部落解放運動－狹山斗争と三里塚斗争、そして全人民の反戦・反ファシズム・反独占の戦いとを固く結合させ、社会主義の反戦・反ファシズム・反独占の戦いとを固く結合させ、社会主義革命へと向う社会主義統一戦線の陣型を、現下の狹山斗争を勝利に向かって徹底的に戦い抜く中で、つかみとり、守り抜き、「部落解放運動と社会主義・労働運動の結合」を更に大胆に押し進めようではないか！

題（朝鮮を頂点とする狹山・三里塚）に対する宣伝、扇動を統一、共同化し、②「北方領土」などの政治問題への対応を統一、共同化され、社会主義統一戦線の結成に向けて、大衆斗争を一方では独自に、他方では、共同して戦う中で、当面は具体的情勢とその変化に応じ、具体的に形成するのである。  
同志諸君・読者諸君！全力・全権力を建党運動に注ぎこめ！



外の分断を強化し同氏の再審斗争への露骨な  
介入が行われたことが明らかにされた。この  
ようすに日帝の刑法改「正」—保安処分及び関  
連諸法案の先取り攻撃の激化に対し、結集し  
て抗争へと発展・飛躍させねばならないと考える。

連諸法案の先取り攻撃の激化に対し、結集し  
て抗争へと発展・飛躍させねばならないと考える。  
まで貫徹し都心に向けたデモンストレーションを終始戦闘的に打ち貫いたものである。

同志諸君!! 我々は日帝の体制的危機が始

まり深化し、社会主義革命へ向けた革命情勢

が端緒的に始まりつあると情勢を抱えてき

刑法改「正」—保安処分攻撃粉碎  
刑訴法・監獄法・少年法改「正」粉碎

赤堀差別裁判糾弾!! 「抗告棄却—死刑執行」阻止!! 再審貫徹!! 赤堀氏奪還!!  
日航機よど号ハイジャック裁判勝利!!  
獄中8年非転向の高原氏奪還!!  
大阪、東京「公聴会」粉碎

# 釜ヶ崎の闘いは、口述・社会主義を求める我々の自辯

'72年、釜ヶ崎の鈴木組斗争が始まる、戦斗的下層労働者の斗いは釜ヶ崎共斗会議、山谷現場斗争委員会という組織運動基盤を失ないつつも、脈々と寄場労働者の斗いの中に受け継がれてきている。

特に'70年中期以降、全般的危機に突入した世界一日本帝国主義の恐慌が深まる中において、好況期には安くこき使われ、恐慌期には切り捨てられる。いわば景気の安全弁としての不安定未組織労働者の滞流する山谷、釜ヶ崎を始めとした寄場において、文字通り「生きぬく」ための斗いはますますその重要度をましてきてる。山谷現斗、釜共斗の斗いが、「悪質業者、暴力手配師追放」を旗印とした現場斗争一日常的なヤクザ、ボリ公、モガキ等との実力攻防戦を軸として展開された斗いの質は、「やられたらやりかえせ」という戦斗的民主主義の斗いではあり、そこにはプロ独、暴力革命の質を明確にしきつてはいなかった。しかしそうした質を眼前の具体的な抑

圧暴力機関—ヤクザ、ボリ公に普段にぶつけてしまつたが故に労働者の圧倒的信頼を勝ちとり、同時に着実に戦果を上げていったのである。

当時の越冬斗争は、そうした日常的攻防戦の積み重ねのうちに行なわれたのであり、冬場に仕事のなくなる寄場労働者の「救済」ではなく、攻撃的斗争として貫徹されていったのである。

こうした意義を断固として評価すると同時に、我々はいくつかの問題を指摘していかなければならない。

それは、寄場労働者のプロレタリア機関として、それまでの山谷の権大介に象徴される経済主義的傾向、労働者蔑視を内包した救済主義的傾向を、具体的な斗争をもつて批判し尽くしたが、逆に寄場労働者の存在、自然発生性に拝抱し、特殊化する傾向を生み出していくのである。それは「下層プロ論」として体系化され、「窮民革命」として極限化されていく。あるいは「下請労働者」にみられる「下請労働者こそ労働者階級の本流だ」という主張、そして多くの寄場活動家にみられる「一般的の奴らに俺達の気持がわかるか」という傾向としてあらわれる。確かに、相対的過剰人口の滞流する寄場は、資本の矛盾が集中し、最も多くの抑圧—保安処分の実体的進行衣食住の剥奪等、まさに「生か死か」を直接問われる矛盾が集中している。特に日本資本主義の成生、発展における特徴としての本請け—下請け—孫請け、本工—臨工という二重構造、低賃金の構造とその二重、三重の労働者搾取を、天皇制を頂点とし、被差別部落を沈めとして分断支配する差別構造の真只中に寄場が置かれてきた歴史をみるとならば、「やられ続けてきた歴史を、生きぬくためにやり返す『斗い』は、日帝打倒の重要な一翼を示すであろう。

しかし、民族解放を含む社会主義革命である当面する日本革命においては社会主義統一戦線を創出せねばならない。であるならば、その一分遣隊を絶対化特殊化するのは誤りである。労働貴族の抬頭をもって、そのクビキの下にいる労働者全体を切り捨てるの

は日和見主義である。告発主義、排外主義に陥り、社会ファシズム論の誤りを繰り返すことになるであろう。こうした中で、かつて釜ヶ崎における部落差別がおきたことを想起すべきである。我々は被抑圧、被差別大衆のそれぞれの歴史的、社会的相違を明確に抑え、団結すべきであり、労働運動の右翼的再編をJC・同盟を始めとした労働貴族を打倒し、くい止め、全国三千万労働者の革命的合流を勝ち取るべく努力していかなければならない。

ここ数年の越冬斗争は、釜ヶ崎、山谷、寿ともに争議団、先進的労働者との合流をかちとりつ展開されている。山谷では、部落大衆、三里塚農民との合流をなし、労農水学の団結をかちとする萌芽を示している。特に山谷労働者の今越冬斗争における三里塚三月開港阻止の決意に燃えた。具体的な連帯行動は断固として評価すべきである。

確かにここ数年、釜ヶ崎日雇労組、寿日労、山日労、山統労として運動の定着と全国日雇共斗結成の方向の定着は進行してきている。恐慌が深まる中で労働運動が、現場斗争に止まらず制度要求斗争—対行政斗争の比重が高まるのは労働組合運動としては必然であろう。そうした傾向を一定認めつつ、流動的不安定未組織労働者としての寄場労働者は、組合に単に包摂されることを望んではいない。仕事を出せ、福祉を出せ、という要求に止まらず、真に寄場解放を達成するためには、全労働者階級の解放、すなわちプロ独、社会主義革命を戦取していかなければならない。

日雇いとして生産手段から普段に疎外されている寄場労働者は、人と人との関係に資本主義の序を凝縮する傾向がある。即ち、洒であり、バクチであり、ケンカである。資本主義の労働者攻撃の結果であるこうした現象をとりあげ差別が醸成され、権力はこれを利用し、アル中狩り等として保安処分をかけ、低賃金を押しつけ、果ては殺していく。一部の諸君は、これを特殊化し、対権力のエネルギーに転化せんとして様々な意味付与を行い、下層プロ論に陥っている。

我々は「綱領草案」で勝ち取ってきた資本主義批判を武器に、所有制を要として分配の問題、人と人との関係の問題の変革をプロ独社会主義革命として戦取していかなければならない。かつて寄場労働者、釜共、現斗の持っていたプロ独、暴力革命の萌芽を継承しつつ、社会主義をもって寄場解放、全労働者の解放を戦取していくなければならない。そのためにも、路線を堅持し、なおかつ「労働者にとけこむ能力を持った」(レーニン「左翼小児病」)中核を全国寄場に配置し、ともに勝利に向けて隊伍を整えていかなければならぬ。

# 激化する帝國主義間矛盾と日本経済のゆくえ 78年である』

没落する米帝と抬頭するソ連社帝、西独帝との帝国主義間矛盾の激化

米国のブルジョア階級は、白人小農民を没落させ、賃金奴隸（プロレタリア）に転化させると共に、一八六五年の南北戦争の勝利によって、南部の奴隸制を廃止し、黒人奴隸を産業予備軍的賃金奴隸として「解放」し、また、南欧、東欧移民などを安価な労働力とし、豊かな国土、資源を利用して、大工業を東部を中心に発達させ、驚くべき勢いで、資本主義を発展させていった。飛行機や電信、電話を発明し、ラジオ、テレビ、自動車を大衆化し（これらは、広大な国土の必要性から資本主義によって、発明され、大衆化された。同じように、ロシアも国土は広大であったが、この頃、まだ封建制が存在していたため、資本主義の発展は遅れ、こういう発明はなされなかつた）、強力を競争力をもつて、国外に進出し始め、一八九四年には、英帝を抜いて、工業総生産額世界第一位となり、以降、第一次世界大戦、第二次世界大戦を経て、他の帝国主義諸国を没落させ、世界市場の絶対的な覇者として君臨した。

しかし、おどれる者は久しからず、現在では、米帝は、もはや、世界市場の絶対的な覇者ではなくなつていて。

一、二撃で、簡単に片づけるはずであつたインドシナ侵略反革命戦争が、ベトナム、カンボジア、ラオス人民の不屈の革命戦争によつて泥沼化し、米帝は長期に渡つて、経済を軍事化しつづけざるをえず、飛行機、コンピューター、ミサイル、銃火器などの軍需関連産業では依然、ナンバーワンの競争力（武器輸出は世界第一位）を保持しつつも、カラーテレビ、ステレオ、自動車、電子レンジ、鉄鋼などでは、設備投資、技術革新もろそかになり、日帝や西独帝に追い抜かれ、経済戦争で敗北しているのである。日帝や西独帝は、ベトナム、カンボジア、ラオス人民と米帝の死闘を利用して、腐肉をあさるハイエナのように、抬頭して來たのだ。だから、夢よもう一度とばかりに、新日鉄会長の稻山は、「どこかで戦争でも起きて日本へ注文がどつと何千億円もはいらないとだめだ」とその本性を露わにしているのである。

もちろん、抬頭してきたのは、日帝や西独帝だけではない。カンボジアの反動派・ロンノル政権を最後の最後まで承認しつづけ、ベトナム革命戦争を故意に長期化させようとはかり、もつて、ベトナム革命を利用して、米帝をアジアに釘づけにしておき、その間に、ヨーロッパ、中東、アフリカで、拡張をおし進めようとしたソ連社帝がいる。ソ連社帝は、ファシズムであり、最も危険な帝国主義であり、経済の脆弱性を強大な軍事力で補完、代位し、西欧や日本を米帝から奪い、自己の勢力圏にするために、戦争を準備し、発動せんとしている。

こうして、第一世界の米帝は、第三世界の民族解放斗争から正義の攻撃を受け、第二世界の日帝、西独帝から経済戦争を仕掛けられ最大の争覇の相手、第一世界のソ連社帝から純然たる帝国主義間戦争、勢力圏再分割戦（主要な獲物は西欧と日本であり、この第二世界をめぐって両覇は争っているのである。だから、ソ連社帝と西欧諸帝、日帝との帝国主義間矛盾は日に激化していっている）を挑まれている。

しかし、かつての地位を喪失したとはいえ、やはり、米帝はいまだ、相対的には世界の覇者であり、だからこそ、経済戦争においても、日帝や西独帝に内政干渉を出来る力を持っており、この超大国をあなどることは決して許されないのである。

米・日・欧の経済戦争は、『貿易立国』

日帝を地獄に突き落とす  
米帝は拾頭してきた日帝に対する反撃のため、経常收支の赤字転換の時期の明示、関税の引下げ、輸入制限品目の自由化と輸入の拡

大などを強要して来ており、同時に、同時に、鉄鋼ダンピング提訴、輸入品の量規制をも、おし進め、自由競争から保護主義に転換しつつある。西欧諸帝も同様の態度で、日帝に臨んでいる。これらの事態は、確かに、日帝の競争力の強さに表われている）を示している。しかし競争力が強いからといって、経済そのものが健全で、強力だとは限らない。

まさに、この典型が日帝である。

トヨタ、ソニー、新日鉄などの独占資本が商社を通じて、第三世界の原料や労働力を収奪し、搾取し、国内では、生産性向上のストーガンの下に、労働者に奴隸労働を強制し、低賃金（七五年度の一時間あたりの賃金比較は、米11ドル10セント、西独8ドル41セント、日本5ドル89セントである。これに反して、物価は日本が一番高いのである。）に押さえ込み、もつて、商品コストを低くし、外国へ輸出しまくり、外貨を稼ぎまくっているのである。しかし、このようないい消費者を世界中にもとめる大工業は、国内では大衆の消費を飢餓的最低限度まで制限し、こうして自分自身の国内市場をほりくずすことになる」と教えている。

これが、ブルジョア階級のいう『貿易立国』の正体なのだ。

ブルジョア階級のやつていることは、刀の上を歩いているに等しい程、危険なことである。国内産業を破壊し、疲弊させ、輸出産業だけでもつて、日帝は、米帝や西欧諸帝が保護主義に転換すれば一挙に、黒字国から赤字国に転落し、地獄の底に落ち込んでいくからである。福田政府のブレーンのエコノミストや佐野の近代経済学者、エセ・マルクス主義経済学者の願望、思惑や見通しに反して、事態は、このように進んで行く。競争力は強くとも、経済そのものは不完全であり、歪みを持つ日帝は、やはり、ハリコの虎なのである。七八年は、このことを歴然とさせていく年になるにちがいない。

日帝は、米帝、西欧諸帝の反撃をさけるため、黒字ペラしと称して、例によつて、農作物輸入の自由化など、農業・農民に犠牲をおしつけようとしている。しかし、日帝が、農業・農民に一層の犠牲をおしつければ、おしつける程、農民は自民党から離反し、労働者階級と同盟して、小商品生産の集團化（人民公社化）を目指す、労農同盟・社会主義統一戦線が結成できる客観的条件が醸成されている。もちろん、米帝や西欧諸帝もこのような小手先の黒字ペラしに満足するはずがなく、次第に、保護貿易、保護主義を強め、日帝を危機に陥し入れていくのである。

このような『貿易亡国』から国を救えるのは、労働者階級だけである。

労働者階級は、日帝の危機に際し、政府を陰に陽に、助けている社「共」公民などの隠然たるブルジョア政党と訣別し、日帝の危機を利用して、軍隊、警察、官僚機構を暴力革命で粉碎し、プロレタリア階級独裁を樹立し、資本家階級の占有している生産手段を收奪し、社会の共有に移す社会主義革命へ向むねばならない。こうして日本を社会主義国にしてこそ、労働者に対する搾取と奴隸労働を廃止し、過剰生産恐慌の原因である社会的生産における無政府性を廃し、計画経済をうちたて、国内経済を健全、強力なものにし、第三世界を中心とする諸外国と平等互恵の貿易をやり、世界革命にも物質的な援助をしていくのである。

# 一大反動攻撃で全人民の力を粉碎せよ

## 一六 反動攻撃・刑訴法改悪を粉碎せよ。

嵐は福田の「今回のような非人道的暴力に対し、国内諸対策を強化する」の大号令の下に「ハイジャック防止法容疑」の口実をもって無差別的な全国的ガサ入れ、併せて「国内支援組織の解体」を目的とした「特別專従捜査班」をもつてその第一期的弾圧を行った。統いて第二弾として行われたのが「ハイジャック防止法」とその関連諸法規の改悪であった。具体的には「旅券法」「出入国規制」の改悪とその強化であった。日帝ブルジョア階級はこうした一連の大弾圧で満足した訳けでは決してなかつた。奴らはこの「ハイジャック防止」の口実をブルジョア・マスコミを大動員し「過激派狩り」と結びつけ労働者階級人民の上に一大反動攻撃を仕掛けてきたのだ。

「弁護人抜き裁判」||刑事訴訟法改悪を粉碎せよ。

昨年十一月二十八日法相瀬戸山は9/28ハイジャックに対し、当初の「人命尊重」など打ち捨て「法治国家を維持できない方策を断じて繰り返すべきではない。やむを得ない場合は一部人命が犠牲にされることもありうる」と公然と白色テロルを宣言した。それと同時に（刑訴法二八九条）「死刑又は無期若しくは長期三年を超える懲役若しくは禁錮にあたる事件を審理する場合は、弁護人がなければ開廷することは出来ない」のいわゆる「必要的弁護の規定」に例外規定を設け、それを改悪し「過激派の裁判促進を図るために」「弁護人なしのまま審理が進められる」よう、刑訴法改「正」要綱をまとめて法制審議会に諮問したのである。これを受けて法制審は十二月十五日・十九日とわずか二回の「審議」をもつてアリバイ的に形式を整え今年一月三日総会に於いて原案通りに採択、答申したのである。そして、答申を受けた瀬戸山は「待つました」とばかりに三月末国会上程の策動を開始した。法務省がいかに「ハイジャック防止のための弁護人ぬき裁判」を強弁し、あまつさえ「改正の狙いは過激派対策だ」と主張しようとする本音を隠すことは全く出来ないのは当然のことである。しかも「ハイジャック防止」とこの刑訴法改悪の暗黒、ファシズム裁判を結びつける粉飾のためもち出したのが「人質強要処罰法」の新設である。「乗っ取り犯死刑新設」の意図に下づくこの法案は「死刑新設」が現行刑法をいかに悪解釈をしようと実現不可能であると言う現実に直面し「特別立法の性格から過激派対策の緊急性に目的をしぶり」法制化されんとするものである。

ここに至つて、この刑訴法改悪の本質は明らかとなつたであろう。「過激派裁判の遅延防止」などと言う。たわごと裏腹に一挙に「過激派」の名の下に労働者階級人民の發展爆発する人民闘争を圧殺せんとしてきたのである。昨年五月の三里塚岩山大鉄塔破壊・東山君虐殺89揆山上告棄却そして連続的な反動判決と打ち続くブルジョア階級の反動化は不可避に広範な人民の反動化に抗する闘いを人民闘争として発展させてきている。しかもこの發展し爆発に向う労働階級の闘争は月開港をブルジョア階級の空問句とせんとしている。他方では反動攻撃の主軸をなす、刑法改「正」一保安処分攻撃は昨年11月の広島、高松「公聴会」粉碎闘争の高揚を見るまでもなく、はつきりと今春策動されている、大阪、東京「公聴会」粉碎闘争の爆発を予見している。とりわけ刑訴法改悪がかかる情勢と連動し合いながら今春三月一挙に法制化されんとしているのである。すなわち「過激派裁判の迅速化」を計り事質審理を圧殺し公判闘争を圧殺し早期決審、極刑攻撃をもつて人民闘争の發展にクサビを打ち込まんとしているのである。そしてこの策動は単に刑訴法改悪に止まるものではない。すなわち「刑法改「正」」に「被収容者に対する実力強制は刑事施設の規律秩序を維持するための徹底した転向強要を合法化せんとするものである。刑訴法改悪、ともどもこの監獄法改悪を全人民の手で小端微塵に粉碎せねばならない。

刑法・刑訴法・監獄法・少年法改悪を利用した。警察・検察・裁判所・監獄の強化を打ち碎こう!!

〔帝国主義の軍事的支柱の肥大化を許さない〕

『革命通信』の読者諸君、同志諸君、今まで見てきた如くブルジョア階級独裁の反動攻撃は三里塚、狹山、そして刑法改「正」・保安処分攻撃、及び諸関連法規の改悪として、一挙的、全面的に労働者階級人民に襲いかかってきてる。したがつてこの激動期にあって我々は一層強固に路線的確信を打ち固め敵の奇襲的攻撃に十分に備えておかねばならないのだ。

我々は、綱領草案で「プロレタリア階級と勤労人民は、朝鮮侵略反革命と戦争に反対する闘争、反動化と天皇制ファシズムに反対する闘争、國家独占資本主義の下での搾取、収奪、抑圧の強化に反対する闘争などを激化させ、発展させ、爆発させつつある」とし大衆闘争の三大水路を鮮明にした。そして「総じて日本帝国主義の体制的危機が始まり、社会主義革命へ向けた革命情勢が端緒的に始まりつつある」と情勢をとらえている。この革命情勢の端緒的開始に規定され、同時にプロレタリア階級の政治的進出と社会主義革命へ向けた前進を圧殺、紛糾せんと日帝の全面的反動化が進行しているのである。日帝はこの体制的危機に対し、第一に、帝国主義の社会的支柱たる労働貴族、社会帝国主義、修正主義を議会を通じて「連合政府」へ動員せんと一方、他方に於いて、天皇制を前面化し、軍隊・警察・官僚機構を肥大化し帝国主義の軍事的支柱を強化せんとしているのである。そして、この危機の中で没落する小ブルジョア階級を天皇制の下に反共、反革命で動員せんとやっきになつてゐる。そして、これらの日帝の反動化の当面する中心環こそが、刑法一〇号ハイジャック闘争「被告」として8年に及ぶ超長期未決勾留攻撃に抗し、断固として非転向で闘う高原氏に対して、その不屈の革命精神に対し、非転向を唯一の理由に保釈却下攻撃をしかけてきていたのである。日帝の尖兵、東京地裁ナンバー1のファシスト分子ミニ原のこの転向強要、長期投獄攻撃等々は全て刑法改「正」の先取り攻撃であり刑訴法改悪の実質的適用攻撃なのである。この先取り攻撃は高原氏だけにかけられたものではないそれは1/29刑法、刑訴法改悪阻止全国総決起集会(5/28実行委主催)に結集した多くの戦線の発言の中にはっきり示されていた。無実の石川氏への上告却下・獄死攻撃宮城刑務所での無実の赤堀政夫氏に対する監獄法改悪の先行的攻撃や、保安処分の先取り、寄せ場日雇労働者にかけられている裁判所・検察・国選弁護人の三昧一体となつた、弁護人なしの暗黒裁判、刑訴法改悪攻撃などでも明らかである。

全国の「革命通信」の読者諸君、同志諸君、すでに刑訴法改悪攻撃は具体的に開始されているのだ。刑法改「正」一保安処分攻撃を主軸とし一挙的大反動攻撃を我が「綱領草案」が主張する「天皇制ファシズムと反動化に反対する民主主義闘争」として位置付け、その發展爆発をかちとると同時に反弾戦闘線を社会主義統一戦線の一方開戦に転化・成長すべくプロレタリア階級独裁の思想で武装し、「天皇を頂点とする單隊・警察・官僚機構を粉碎し全人民の武装」をかちとろう。

我が「革命通信」と固く結合し、刑法・刑訴法・監獄法・少年法改憲の大反動攻撃を粉碎せよ。

- 刑法改「正」一保安処分攻撃粉碎！ ○全ての未決超長期拘留攻撃粉碎！
- 刑訴法改悪粉碎・三月国会上程阻止！ ○獄中非転向貫徹！ 高原氏奪還！
- 監獄法・少年法改悪粉碎！ ○暗黒裁判・早期極刑判決粉碎！

# 資本家・労働貴族が一体となつた「負上闘制・首切り合理化」に抗し、78三里塚春げの「万の潮流を！」

(下)

2、労働者階級は戦争の危機に備え、革命の要素を更に拡大強化していかなければならぬ。

J C、同盟を始めとする帝国主義、社会帝国主義労働運動と労働貴族の共同歩調の下に押し進められてゐる。すなわち右翼的労働運動の育成と原則的、階級的労働運動の圧殺は表裏一体のものとして、日帝ブルジョワジーが恐慌期に入った現在、自から延命せんがための攻撃なのである。

73年石油ショック以降顕在化した日本資本主義の危機は、単なる景気循環的な危機であるだけではなく、戦後未層有の危機としてまさに「革命的情勢」(レーニン「第二インタナショナルの崩壊」)が端緒的に始まりつつあることを示してゐる。すなわち、「下層」、人民が今まで通り支配されていくことを望まなくなり、「上層」、ブルジョワ階級が今まで通り支配していくことができなくなる情勢が始まつてゐるのである。

その経済的背景は以下のように形成されていった。(1)71年8月の金ードル交換停止がIMF体制=国際通貨管理制度を事実上崩壊させ、変動相場制をとることによつて、各國が為替レートを自分に有利にしようとしてしげあい、いわゆる通貨戦争を行ない、ドル=金という信用と固定為替レートによる、輸出→ドル獲得という成長パターンを不安定なものにした。(2)73年10月のアラブ産油国の「石油戦略」によつて、安い石油資源を輸入し利用することができなくなつた。(3)60年代高度成長を保障した基幹産業の設備投資、技術革新が飽和状態に達し、慢性的な設備過剰があらわれ、設備稼動率が急速に縮小した。(4)、高度成長の大きな要因であつた輸出の増大とともに、なつてドル蓄積、厖大な外資準備を持つに至り、ドルの威信低下を円の切上げによって回復しようとする国際的圧力が増強された。

こうした中で深刻なインフレ不況に陥つた日本資本主義は公共投資による需要拡大も飽和状態にある設備の中で新たな設備投資を呼びおこすことができず、更に通貨戦争の激化による輸出の停滞等の中で、ますます窮地においこまれ、その矛盾を強圧的に労働者階級に転移し、市場再分割戦=朝鮮アジア侵略反革命戦争を開始せんとやつきてになつてゐるのである。「今まで通り支配していくことができなくなつた」ブルジョワ階級は延命の道を「連合政権」を軸とした権力再編と朝鮮アジア侵略反革命戦争に見出そうとしているのである。

こうした日帝ブルジョワジーの野望は、米、ソ両超大国の霸権争奪の中にはつて、第三次世界大戦の引き金にもならんとしているのである。すなわち、現在、米帝は朝鮮の民族解放闘争に対する侵略反革命を日帝に肩替わりさせ、戦略の重点を欧州でのソ連社帝との霸権争奪に移し、きたるべき第三次大戦での主導性を確立せんとしている。しかし、これは米帝の主觀にすぎず、実際には不可能である。朝鮮革命、つまり自主的平和的南北統一闘争と南朝鮮の反米、反日、朴打倒の民族民主革命は不可避に爆発する。これに対しても、日帝は南朝鮮を最大の植民地、最大の生命線としているので必ず侵略反革命戦争にのり出し、米帝を引っ張り込む、日帝がソ連社帝に頼り、日本をソ連社帝に奪わることを避けるために、米帝は日帝と共に朝鮮侵略反革命戦争にのめりこまるを得ない。日帝、米帝の朝鮮侵略反革命戦争は不可避である。このような情勢の中で、ソ連社帝は、第三世界の民族解放闘争と西欧、日本の社会主義革命を「支援する」、朝鮮革命と日本革命を「支援する」という口実で、西欧と日本に進攻し、米帝に対する戦争を開始するであろう。こうして米ソの第三次大戦はソ連社帝が主導的、攻勢的で、米帝が受動的、守勢的な関係で始まるであろう。

まさに日本帝国主義の危機の延命としての朝鮮、アジア侵略反革命戦争の野望は米ソの霸権争奪といふ世界情勢の中で第三次大戦の引き金に他ならないのである。

日本の労働者階級は戦争の不可避性は、必ず日本の社会主義革命の爆発をもたらし、プロレタリア階級独裁、社会主義革命の勝利をもたらすことを確信し、現下の日帝ブルジョワジーの労働者、勤労大衆へのファシズム的攻撃、生活破壊の攻撃の本質を見抜き、安保粉碎日帝打倒、米帝追放、プロ独、社会主義革命の路線の下、戦線を強化し闘つていかなければならぬ。

## 3、労働者階級の武器はマルクス・レーニン主義の資本主義批判である

ブルジョワ階級の労働者・勤労大衆への搾取の強化、抑圧、他民族への侵略、反革命は資本主義社会における生産手段をブルジョワ階級が占有し、剩余価値を拡大せんがための攻撃に他ならず、それは階級闘争の激化としてあらわれるのである。しかし、これは、ブルジョア階級に労働者が経済的に従属している事の諸結果に対する斗いである。プロレタリア階級は生産手段をこの手に握りしめねばならぬ。

このことは、マルクスが「第一インタナショナル一般規約前文」において「労働手段、すなわち生活原泉の領有者の下への労働者の経済的従属は、あらゆる形態における隸属制の社会的貧困、精神的委縮、または政治的従属の基礎である」と示しているように共産主義革命の核芯なのである。

資本主義の生産関係においては、第一に生産手段の所有制について、生産手段を独占的に私有する資本家階級が、生産手段から分離した労働者階級を経済的に従属させてゐる。労働者は生きしていくためには、労働力を売つて資本家の雇い人になる以外にない。この政治的反映として資本家階級が国家権力を握つたブルジョワの階級独裁があるのである。これが主要な側面である。第二に生産における人と人の関係について、労働者は剩余価値の生産を目的とする資本家の下で奴隸労働、賃金奴隸を強制されている。第三に生産物の分配について、労働者は生きていけるだけの分、必要労働の分を賃金として得るだけで、それを越える分、剩余労働の分は資本家が利潤として、無償で取得し、搾取する。

我々はこうした資本主義生産関係を所有制を軸に批判しつつ共産主義でもつて覆えしていかなければならない。ちなみに、賃金問題は「分配」の問題であり、合理化・差別・分断・抑圧等は「人と人との関係」の問題であり、それらの基礎はブルジョア階級に占有されている。労働者は生きていけるだけの分、必要労働の分を賃金として得るだけで、それを越える分、剩余労働の分は資本家が利潤として、無償で取得し、搾取する。

我々はこうした資本主義生産関係を所有制を軸に批判しつつ共産主義でもつて覆えしていかなければならない。ちなみに、賃金問題は「分配」の問題であり、合理化・差別・分断・抑圧等は「人と人との関係」の問題であり、それらの基礎はブルジョア階級に占有されている。労働者は生きていけるだけの分、必要労働の分を賃金として得るだけで、それを越える分、剩余労働の分は資本家が利潤として、無償で取得し、搾取する。

## 4、原則的、戦闘的労働運動の陣陣型を構築し、プロ独・社会主義革命を戦取しよう

原則的、戦闘労働運動の細流については既に展開した。我々はこうした細流を戦争の危機に備え、マルクス・レーニン主義の資本主義批判を軸に共産主義と労働運動の結合をかちとり、巨大な流れを形成するとともに、「修正主義・社会帝国主義の『共産党』・社会主義協会を打倒し、日本プロレタリア階級を組織して、マルクス・レーニン主義党を創建」(綱領草案)していかなければならぬ。

日帝が資本主義自らが生み出す危機を、労働者勤労大衆に転移し、すでに春闘方式は破産し、労使協調、企業防衛に走るJ C同盟、総評民間の既成指導部のクビキから、全国三〇〇〇万労働者を解き放ち、階級性の原則的、戦闘的復権をかちとつていかなければならぬ。

日帝が資本主義自らが生み出す危機を、労働者勤労大衆に転移し、

更なる市場を求めて、侵略反革命を開始するならば、我々はそれを

断固紛糾していかなければならない。78春闘の真只中に3月30日三

里塚軍事空港開港を策動する日帝は、労働者勤労大衆に対する搾取、

収奪の強化、生活破壊攻撃の返す刀で農民虐殺、他民族抑圧の三里

塚空港を開港せんとしているのである。

我々はこれを労働者、農民を始めとする全人民への日帝の重大な挑戦として受け止め、文字通りの「三里塚春闘」として隊列を強化していかなければならない。この闘争こそ、全国労働者を既成指導部のクビキから解き放ち、プロ独・社会主義革命勝利の大きな試金石となるであろう。

すなわち、75・76・77春闘三連敗が労働戦線の右翼的再編と、年体制の崩壊をも供なつて現出している現在、78年の労働運動を文字通りのプロ独・社会主義革命の内実をもつて展開し抜く責任がますます問われてくるからである。プロ独・社会主義革命の内実を持つ労働運動とは、経済闘争、民主主義闘争を原則的に勝利し抜くとともに、全民民的政治闘争を労働者階級が領導する権力闘争として闘い抜くといふことである。レーニンが「なにをなすべきか」でも再三展開しているように、労働者階級は「雇い主と政府にたいする労働者経済闘争」という自然発生的な経済主義に止まる限り遂には敗北するのであり、共産主義を労働運動に目的意識的にもちこまない限り勝利しえないのである。三里塚闘争はそうした全人民的な政治課題の最も緊要な闘いであることを我々は全ての労働者階級に提起していかなければならない。

# 革命通信

定期購読を要請す！  
同志諸君・読者諸君！『革命通信』の経済体制を打ち固め  
発行の定期化と内容の向上の為に、定期購読を要請する。

10回+郵送料=一千円

經濟評論

# ケインズの麻薬に溺れる福田政府

## 公共事業と経済の軍事化で資本主義は救えるか

経済の軍事化をたくらむブルジョア階級

ブルジョア階級は、公共事業による需要の創出だけでは資本主義をすこしでも長く延命させていくことが不可能であることを見知つており、やはり、ケインズ主義に従つて、経済を軍事化させていこうとたくらんでいる。現在、ブルジョア階級は、「産業構造の転換」を叫んでいる。しかし、その転換の内容については秘されている。なぜなら、それは、経済の軍事化への転換であるからだ。

住友金属・日向、新日鉄・稻山など鉄鋼独占を中心にして、軍備論、戦争待望論が主張され、公明党が安保体制と自衛隊を言葉の上でも認め（実際上では社「共」も認めている）、造船重機労連、東京電力労組、松下電器労組などの労働貴族指導部は、武器生産を主張し、憲法九条の改変を要求している。總じて、ブルジョア階級は、公然たるブルジョア政党・自民党と隠然たるブルジョア政党である野

福田政府、野党、労働貴族は声をそろえて公共事業をおこしさえすれば景気がよくなると諂論を吐き、人民をだましている。しかし、このよなケインズ主義で本当に景気がよくなるのだろうか？ならない。そもそも、第一に、福田政府のおこす公共事業は、国民のため、国民生活に密着したものなどと宣伝されているが、あくまでも独占資本に奉仕するものであり（三里塚空港建設を見よ！）、今年度の公共事業にしても、不況で利潤が落ちこんでいたセメント独占、鉄鋼独占の利益を確保するのが目的である。第二に、公共事業は赤字国債や増税で経費を捻出しているのである。つまり、国家独占資本主義に搾取された剩余価値、人民の血税である。大型予算、大規模な公共事業を独占資本のためにおこせばおこすほど人民は増え、搾り取られ、貧乏になり、人民の購買力は増え、低下し、生産の社会化と取得、所有の資本主義的性格の矛盾といは資本主義の基本矛盾によつて決定されている拡大する生産と人民大衆の購買力の縮小化の矛盾をより深刻にし、より大きな恐慌をひき起すのである。

福田政府、野党、労働貴族の公共事業で景気がよくなるというデマから人民大衆を解き放ち、福田政府の増税策動に対する人民大衆の怒りを組織していかねばならない。

公共事業で景気がよくなるといふ諺論

はたす能力を獲得させることを自己の任務とする国際共産党は、プロレタリアートをすべてのブルジョワ政党に対立する独自の政党に組織し（綱領草案）していかなければならない。すなわちプロレタリアートをマルクス・レーニン主義党として組織していかなければならぬ。

ブルジョア階級は、生産性向上のスローガンの下に、労働者に對して、奴隸労働を強化しつづけ、低賃金を強制しつづけ、安い商品を外国へ輸出しまくって、巨大な利潤をあげてきた。しかし、このような『貿易立国』の破綻は、すでに誰の目にも明らかである。

ブルジョア階級は、「新しい消費者を世界中にもとめる大工業は、国内では大衆の消費を飢餓的最低限度まで制限し、こうして自分自身の国内市場をほりくずすことになる」（『空想から科学への社会主義の發展』）と教えてくる。

ブルジョア階級は、戦後三十年で、一部大企業の輸出は大幅黒字であるが、国内では不況が長期化し、倒産、首切りがあいついでいるといふ歪んだ状態にまで日本経済を追いや込んだ。米帝、西欧諸帝が保護貿易主義に完全に転換し、輸出が阻止されると日帝は国内市場を疲弊させてしまった故に、逃げ道がなく、極度の危機に落ちいる。こうした危機意識のもとに、福田政府は、経常収支の赤字、輸入の拡大、七ペーセント成長という米帝、西欧諸帝の要求を受け入れ、与野党一致協力して、七ペーセント成長実現のため資本主義の延命のため、大型予算を組み、公共事業を大規模におこすことを決めた。つまり、与野党が一致して、ケインズ主義の反動性をしつかりと見抜き、批判しなければならない。

党や労働貴族、マスコミを動員して、国防問題を「論議」させ、人民の意識をマヒさせ、官制の合意をつくりあげ、一トンの鉄より一トンの武器を輸出して、より利潤をあげ、また、自らも軍備を増強し、朝鮮侵略反革命戦争に進もうとしている。これが「産業構造の転換」の内容であり、ブルジョア階級の意図である。

しかし、経済の軍事化は、たとえ一時的に生産に刺激を与えて、必ず、増税と消費財の高騰をまねき、人民の購買力を低下させ、より一層、深刻な恐慌へ突き進む。これらのことは、ソ連社帝と米帝が経済の軍事化をおし進め、消費財生産を縮小させて、物価の休みない値上がりをまねき、国防費として、人民から巨額の血税を吸い上げ、より一層、人民を貧乏にし、購買力を失わせ、生産そのものが破壊され、停滞している状況を見れば明らかである。ケインズ主義の麻薬を射つと、より深刻な恐慌といふ禁断症状に襲われ、そのたびに、さらに多くの麻薬を射たねばならなくなるのである。

労働運動の細流を党の下に統合し勝利していくかなければならぬ。我々は大胆に階級闘争の前線に出征していく準備を開始している。わが同盟の旗の下に結集し、労働者階級のマルクス・レーニン主義党を勝利的に創建していこう。

そうするためにも「プロレタリアートにその偉大な歴史的使命はたす能力を獲得させることを自己の任務とする国際共産党は、ロレタリアートをすべてのブルジョワ政党に対立する独自の政党組織し」（綱領草案）していかなければならない。すなわちプロレタリアートをマルクス・レーニン主義党として組織していくなければならない

# 学習欄

『プロレタリア革命と背教者カウツキー』を学習し、トロツキズムを批判し、スターリンを正しく評価しよう。

(1)

レーニンは、一九一七年、四月テーゼで、「プロレタリアートと貧農層の手中に権力を渡さなければならぬ革命の第二段階への移行」、つまり、プロレタリア階級（貧農＝半プロレタリアを含む）独裁、社会主義革命を提起した。これに對して、スターリンは、レーニンが「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」で提起した「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」が実現されていないので、民主主義革命は終つていないと反対した。

このことから、日本の反スタ・トロツキズムは、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」は労農同盟を基礎とするプロレタリア階級独裁であるとし、レーニンが、四月テーゼで、民主主義革命から社会主義革命への二段階革命の路線を民主主義的任務を含む一段階の社会主義革命へ変更したとしている。だが、そうではない。

レーニンは、四月テーゼの後も、民主主義革命でプロレタリア階級と農民の連合独裁を樹立し、プロレタリア階級独裁、社会主義革命へ連続的に前進するという「二つの戦術」で提起した二段階革命の路線を堅持している。変更してはいない。一九一八年、『プロレタリア革命と背教者カウツキー』で明確に確認している。

「ブルジョア革命のさいの諸勢力の階級的相互關係をボリシェヴィキはこう定式化した。革命でプロレタリアートは、農民を味方につけて、自由主義的ブルジョアジーを中心化し、君主制、中世的制度、地主的土地所有を徹底的に破壊する、と。農民一般とプロレタリアートの同盟こそ、革命のブルジョア的性格が現われている。なぜなら、農民一般は商品生産を基盤とする小生産者だからである。さらに當時、ボリシェヴィキは補足して言った。――プロレタリアートは半プロレタリアート全体（すべての被擷取労働者）を味方につけ、中農を中心化し、ブルジョアジーを倒す。ここに、ブルジョア民主主義革命とは違った社会主義革命がある、と」。

「結果はわれわれの言つたとおりになつた。革命の進行過程はわれわれの考え方が正しかつたことを確証した。はじめは『すべての農民とともに、君主制に反対し、地主に反対し、中世的制度に反対する（そして、このかぎりでは革命はなおブルジョア革命である）。ついで、中農を中心化し、ブルジョアジーを倒す。ここに、ブルジョア民主主義革命とのかぎりでは、革命は社会主義革命となる』。プロレタリア階級独裁も、共に、労農同盟を基礎とする。しかし、前者は、民主主義革命における民主主義的独裁であり、封建制を小商品生産に変える（資本主義が發展する）のである。つまり、半プロレタリアートとともに、半ブルジョアジー、中農＝小ブルジョア、富農＝ブルジョアといふ農民全体と同盟する。これに對して、後者は、社会主義革

命における社会主義的独裁であり、資本主義

説明している。

（小商品生産）を社会主義に變えるのであり、「ボリシェヴィキ革命の勝利は、動搖が終了したことを意味し、君主制と地主的土地位階級を敵とし、貧農＝半プロレタリアと同盟するのであり、中農＝小ブルジョアは中間勢力である。労農同盟の内容が異なる。

トロツキズムの「永続革命論」は、民主主義革命でプロレタリア階級独裁を實現し、社会主義的独裁と社会主義的独裁を混同する点が誤まりである。民主主義革命における農民の革命性、プロレタリア階級と農民の同盟を否定し、プロレタリア階級が指導権を握って革命を徹底して實現するのを不可能にし、ブルジョア階級が指導権を握って革命を不徹底に終らせるのを許し、社会主義革命への連続的前進を不可能にする点でニセものである。

それだけではない。社会主義革命に直面している場合、まず、民主主義の要求に基づいて社会主義革命を放棄して民主主義闘争にとどまる急進民主主義である。これが日本の反スタ・トロツキズムである。そうではなく、初めから、社会主義の要求に基づいてプロレタリア階級独裁を樹立しなければならない。プロレタリア階級独裁は社会主義と不可分である。

社会主義を實現するという路線になる。これは社会主義革命を実現するためプロレタリア階級独裁を樹立しなければならない。プロレタリア階級独裁は新しく階級の手に、すなわち、ブルジョアジーとブルジョア化した地主の手に移った。そのかぎりで、ロシアにおいては、ブルジョア民主主義革命は終了した。

これである。「二重権力」、「二つの独裁」――ブルジョアジーの独裁（……リヴォフ一派の政府……）とプロレタリアートと農民の独裁（労働者・兵士代表ソヴェト）――がいっしょに、一つに絡み合つたものが出現したのである。

ソアーリ帝制は、封建制、地主階級を基礎とする絶対主義権力であったので、ロシアでは、民主主義革命に直面していく。一九一七年、二月革命で、政治では、ソアーリ帝制、絶対主義権力が打倒された結果、プロレタリア階級と農民の連合独裁はソヴィエトとして実現された。が、二重権力になり、同時に、農民とともに、君主制に反対し、地主に反対し、中世的制度に反対する（そして、このかぎりでは革命はなおブルジョア革命である）。ついで、中農を中心化し、ブルジョアジーを倒す。ここに、ブルジョア民主主義革命とのかぎりでは、革命は社会主義革命となる。

プロレタリア階級独裁も、共に、労農同盟を基礎とする。しかし、前者は、民主主義革命における民主主義的独裁であり、封建制を小商品生産に変える（資本主義が發展する）のである。つまり、半プロレタリアートとともに、半ブルジョアジー、中農＝小ブルジョア、富農＝ブルジョアといふ農民全体と同盟する。これに對して、後者は、社会主義革

命をなしとげたのち、ロシアのプロレタリアートは、社会主義革命へ最後的に移行した。

そのとき、彼らは、農村を分裂させ、農村のプロレタリアと半プロレタリアを味方につけ、富農とブルジョアジー――農村ブルジョアジーをふくめた――に対抗して、農村のプロレタリアと半プロレタリアを団結させることがトロツキズムの延命を許した。スターリンの誤まりは、ブルジョア階級が権力を握り、独裁を實現してても、地主階級と連合して

いたり、経済では封建制が残存している場合、民主主義革命から社会主義革命への二段階革命とすることである。この場合、そうではなく、民主主義的任務を含む一段階の社会主義革命である。この誤まりは、ブルジョア階級独裁であるのに、統治形態がファンズムの場合、民主主義革命とする急進民主主義を生み出す。これが日本の「毛沢東思想派」である。

この場合、そうではなく、社会主義革命である。つまり、経済では、農村で、地主階級の支配、封建制が残存したので、これに對する民主主

義革命が残存し、社会主義革命に含まれたのを、レーニンは、「背教者カウツキー」で